

健康文化

丑年の男

高田 健三

1997年は十二支でいうところの「丑」の年に当たる。家内に、今年はあなたの年ですよと言われても、その時はだから何なのだろうという程度の感じしか湧いて来なかった。しかし、毎年誕生日が、ああまた一つ年をとったのかという程のものでしかないのに比べると、十二年目に一度しかまわってこない年だというと、この十二年間、よくぞ無病息災で過ごしてこられたものだという感慨がないこともない。特に十二年前の丑年は、われわれ1925年生まれのもの「干支（えと）」に当たるところの還暦を迎えたわけで、昔流に言えば与えられた人生を一通り終了した年であった。人の寿命が短命であった昔は、60年を生き抜くということは並大抵ではなかつたろうから、それなりにめでたいことであったには違いない。しかし、生命科学の飛躍的な進歩のお陰で、わが国も世界有数の長寿国になった今日、60歳が何程の意味があるのか疑わしくなってきた。官庁や会社などで、定年が60歳前後に決められているのは、「人生わずか50年」といわれた時代の古い社会の名残であって、ある意味では体（てい）のよい首切りの理由に利用されているのではなかろうか。自分もその一人だからというわけではないが65歳以上が人口の15%以上も占めるようになった今日、国や社会はもっとシックスティズやセブンティズを働かせるべきではないかと思う。そうすれば年金も節約できるし、社会保険の掛金も安くなるというものである。

もともと干支は十干十二支の略語であり、『万有百科大事典』（小学館）によれば、中国の暦法にある周期の名称である。わが国には6世紀の中頃渡来したものらしい。十干は10日のことで、第1日から甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸の順で当てはめられている。甲、乙、丙などは、我々オールドボーイにとっては小学校の「通信簿」の評価記号としてなつかしくもあり、またほろ苦くもある思い出を誘う文字である。十二支は一年十二ヶ月に、それぞれ自然現象や年中行事に因んだ符号をつけたもので、我々がよく知っている十二種の動物名が当てられている。中国ではこの十干十二支を一干一支ずつ組み合わせることで60通りで一巡する周期をつくり、これで年や月を呼ぶようにしていたとい

う。例えば十干の初めの甲（きのえ）と、十二支の初めの子（ね）の組み合わせた甲子（きのえね）で始まり、最後は同様にして癸亥（みずのとい）で60番目の終わりとなり、61番目は初めの甲子に戻る。つまり61年目で自分の干支に戻ることから、還暦という意味を持たせたものであるらしい。1年から始まり次の1年までの100年を一世紀とする西暦に例えると、同じ干支に戻るまでの60年は、人生の1世紀に当たるともいえる。昔は、還暦を過ぎた人生は余生という感覚が強かった。今はそんなことを言うてはいられない社会情勢にある。「赤ちゃん」にまで戻っては困るが自分の新世紀が始まると思えば元気も出ようというものである。

我々はよく十年一昔という。一応昔と思われるほどの過去を感覚的に現した時間の表現である。しかし、最近の世相の変化の激しさや、科学技術の飛躍的な進歩の様相を見ると、10年前はもはや大昔のことにように思える。そのうちに、5年前でも一昔と呼ぶようになるのではないだろうか。というのは、十年一昔という感覚が古くから固定していたものではないらしいからである。『広辞苑』（岩波書店）によれば、もとは十七年、二十一年、三十三年前などを意味していたこともあったという。『平家物語』には「昔は三十三年をもて一昔としき。今は二十一年をもて一昔とす」と記されているというから、「一昔」は時代とともに短くなってきているのである。それにしても十七年とか二十一年とか半端な数字が使われた根拠は何なのか、寡聞にして私は知らないが、極めて興味深いものがある。浅学を顧みず想像を巡らせてみると、「今は二十一年をもて……」という断定的な表現は、何らかの世相の折目を尺度にしたものではないか。それは叙事詩的な趣の強い『平家物語』が出典だとすると、平家一門の栄枯盛衰に哀れを感じた作者の、心の中を占めた事柄の一部始終の月日が根底になっているのではないかということになる。折があれば、この辺のことを確かめてみたいと思っている。

ところで、十二年に一度しかまわってこない自分の「丑」は、ものの本によれば、十二支の第二の「牛」に相当し、方角については北北東を意味し、時刻は今の午前二時頃を指すとある。牛は英語で bull（雄牛）といい、象や鯨などの大型動物の雄にも使われる。株式市場では強気筋のことで（因みに弱気筋は bear というらしい）、牛には何となく強い動物のイメージが伴っている。もっとも英語の cow は雌牛を指し、乳牛の連想もあっておとなしい動物のイメージがある。いずれにしても普通はぱっとしない動物のように思われがちである。そこで牛にまつわる故事、ことわざ、たとえなどを調べてみて驚いた。十二支の動物の中では牛に関するものが圧倒的に多いのである。ということは、かつて、

人間の日常生活の中で牛は大きな存在だったのであろう。次に辞書などから引いた例を挙げてみる。

牛つかむばかりの暗がり
牛に汗し棟に充つ
牛に対し琴を弾ず
牛に喰らわる
牛にひかれて善光寺参り
牛にも馬にも踏まれず
牛の歩み
牛耳を執る
牛の一散
牛の籠抜け
牛の寝たほど
牛はいなき馬はほえ
牛は牛ずれ馬は馬ずれ
牛は願いから鼻を通す
牛を馬に乗りかえる
九牛の一毛
角を矯めて牛を殺す
牛首を懸けて馬肉を売る

などなどである。あまり芳しくない内容のものもあるが、全体としてそれほど牛を馬鹿にしたものではないので、丑年の人間にとってはまあまあであろう。世間では十二支でその人の性格などを評することがある。あれは「いのしし年」だから、やみくものところがあるとか、よく喋ると思ったら「とり年」だからとかである。これらは、言われても特に実害があるわけではないが、これが干支になると、そう簡単に片付けられない面があるらしい。その最たるものが「丙午」（ひのえうま）である。これには現代人でも無関心ではいられないらしい。ことの起こりは、丙午の年には火災が多く、この年生まれの女は夫を殺すという迷信なのである。科学文明の成熟した今日でも、日本人の心の中にこの迷信が生きているという証拠は、1966年（丙午の年）に生まれた新生児が、統計上極端に少ないことに表れている。この種の迷信が、一国の出生率を大きく左右する例は他には知らない。実際にこの年の女性が敬遠されているかどうかは知

らないが、この年の若者達は、高校や大学の入学試験、あるいは入社試験で、競争倍率が低くなって随分得をしたと思えば、何かにつけ競争社会である今日、むしろ丙午は幸運の干支なのかもしれないではないか。次回の丙午は2026年であるが、その時の出生率がどうなるか、21世紀の日本人の意識を占う一つとして興味のあるところである。

21世紀といえば、かつて自分が生きている時代などと考えたこともなかったが、それが4年後に近づいてくると、「21世紀人」の仲間に入れる可能性が無くは無さそうに思えてきた。毎年正月にはこの一年はと、思いを新たにすることは格段に異なったものがあるような気もするが、その時になってみないと分からないというのが偽らざる気持ちである。最近、その道の“権威”と称せられる人達が、20世紀の回顧とか、21世紀の展望とかで、出版物やテレビ、新聞紙上を賑わすようになってきた。過去を振り返り、現状を分析し、未来を予測して、いろいろ提言をしてくれてはいるが、日本の状況も世界の混沌も一向によくなる気配がない。毎年、クリスマスカードに世情を評したシニカルな一文を寄せてくるアメリカの友人がいる。その彼の昨年カードに書いてあった文言は、ある種の驚きを与えるほどのものであった。それは、世間では21世紀がどうのこうのといっているが、もっと重要なことは、人類が次の millennium (1000年期)、つまり西暦2000年代を通して、どのような責任を持ち得るかを考えるべきである、といったようなことであった。その本意がどのようなものなのか、私も把握しているわけではないが、キリスト教徒の世界観の深奥の一端を垣間見る思いがする。私などは来年のことでも覚束ないのが、次の丑年のことなど思いも及ばないのが現実である。

人は年を重ねるにつれ、過去はますます長くなり、未来はますます短くなる。東西対立の冷戦時代に、人類の未来さえもがカウントダウンされる程までに縮まった時期があった。幸いにして、危機は回避されたとはいえ、基本的状況は変わっていない。未来の短い私などは、他人を頼ってはいられない。bull型で行くしかない。“過去を顧みるなかれ、現在をたのめ、さらに雄々しく未来を迎えよ”とはロングフェローの言葉である。19世紀一杯を生き抜いたこのアメリカの詩人の情熱は、100年有余の時空を超えた今も猶、私の、いや私たちオールドボーイズの心を励ましてくれているように覚える。

(名古屋大学名誉教授)